

彙 報

会 長 庄垣内 正 弘

2004年度第2回常任委員会

日 時：2004年9月18日（土）14:00～17:00

場 所：京都大学文学部小会議室

出席者：庄垣内正弘（会長）、佐藤昭裕（事務局長）、上山あゆみ、金水 敏、
熊本 裕、日比谷潤子、林 徹、藤代 節、吉田 豊

オブザーバー：吉田和彦（編集委員長）、柘植洋一（大会運営委員長）、森 若葉
（事務局長補佐）

[報告事項]

（1）各委員会からの報告

・編集委員会

吉田和彦編集委員長から、現在『言語研究』第126号を編集途中で、掲載論文が確定し、例年通り11月末日の刊行を目指して編集作業を進めていることが報告された。

・大会運営委員会

柘植洋一委員長から9月11日に大会運営委員会を行ったことが報告された。

（2）広報委員会検討ワーキンググループのメンバー確定について

第1回委員会の決定を承け、会長より、広報委員会検討ワーキンググループのメンバーを金水敏、熊本裕、佐藤昭裕、野田尚史、林徹、吉田和彦の各氏に委嘱した。リーダーは金水氏をお願いした。また中西印刷の中西秀彦専務にオブザーバーとして加わって貰うこととした。

（3）第128回大会の反省点について

第128回大会で、1) ワークショップ2企画のうち一方が意図的に時間をオーバーして行われた、2) 特別展示の時間がオーバーした、といった事故があった。プログラムの予定外の遅れは会場校に迷惑を掛けるので、今後このようなことがないようにそれぞれの企画の応募者に対して注意を求めることとした。

[審議事項]

- (1) 第129回大会(2004年度秋季大会)のプログラム案を審議し決定した。採択率は口頭発表62%,ポスター発表80%,ワークショップ100%であった。また同大会に富山コンベンションビューロー(富山県の外郭団体)から補助金(50万円)を得ることになったことに関連して,同ビューローの名称を「後援」として大会プログラム,ポスターに記載することを決めた。また富山市からも市内での宿泊者1名につき1泊当たり1,000円の補助金が出るようになった。
- (2) 第130回大会(2005年度春季大会)について
国際基督教大学で開催する旨提案され承認された。2005年6月11日(土)・12日(日)開催の線で依頼することとなった。大会運営委員長は日比谷潤子氏に依頼する。
- (3) 第131回大会(2005年度秋季大会)について
2005年11月19日(土)・20日(日)に広島大学で開催する旨提案され承認された。大会実行委員長は町博光氏に依頼する。
- (4) 「第19回『大学と科学』公開シンポジウム」後援について
7月28日付で,第19回「大学と科学」公開シンポジウム(文部科学省科研費補助金研究成果公開促進費「研究成果公开发表(A)」補助事業)の一環として,2004年11月10日・11日に東京国際交流館で行われる「今,世界のことが危ない!ーグローバル化と少数者の言語」(代表者宮岡伯人氏)について後援の依頼があった。審議の結果,後援することを決め,11月の第2回委員会で承認を求めることとした。
- (5) 科研費「時限付き分科細目」の審査委員候補者情報提供について
科学研究費補助金「時限付き分科細目」として「社会開発と文化」分野が平成17年度に新設されることが決まり,8月1日付で審査委員の情報提供の要請があった。言語学会からは,審査委員6名(第1段審査)を選ぶための全候補者18名のうち6名分の情報提供をすることになった。他の12名は文化人類学・民俗学研連と東洋学研連から情報提供される。締切が8月15日と期限が迫っていたため,常任委員会のメーリングリストで審議して,本年2月に行った平成17年度分の通常の審査委員候補者の選挙結果を利用することになり,その順位と専門分野を考慮して6名の候補者を選考し学術振興会に情報を送った。以上の手続について改めて確認した。
- (6) 広報委員会について
広報委員会検討ワーキンググループ・リーダーの金水敏氏より同グループでの議論について報告があった。広報委員会は,ホームページを中心

とするネットワーク媒体による広報活動と大会ポスター、プログラム等を含む従来の紙媒体による広報活動の両方からなる学会の広報活動全般を包括的に扱うこと、その委員長は会長が指名することといった基本的方針が了承され、来年4月の発足を目指し、次回委員会で答申を行い、会則の改定を提案することが決まった。

(7) 『言語研究』の電子ジャーナル化について

広報委員会検討ワーキンググループのリーダー金水氏よりワーキンググループでの議論が報告された。電子ジャーナル化の問題は重要な案件であるため、広報委員会の設立が認められて後、同委員会と編集委員会で情報を収集し検討すること、最終的には常任委員会の責任で委員会に提案すること、という方針を決めた。

(8) その他

- 9月13日付で、CIPL Executive Committee メンバーの下宮忠雄氏より、現在10万円(2003年度は709ユーロ=900ドル)のCIPL分担金を100米ドル上げるよう要請があったことについて検討し、来年度から1万円値上げすることを委員会に提案することになった。
- 日本学術会議東洋学研究連絡委員会委員長池田久氏、東方学会理事長戸川芳郎氏の連名で、学術会議の制度改革により来年9月末日をもって東洋学研究連絡委員会が廃止されることにともない、それに代わる組織として各学協会を会員とする東洋学(アジア研究)連絡協議会を作りたいという参加の呼びかけがあった。このことについて検討し、第2回委員会までに情報を収集したうえで加入するかどうかを決め、同委員会に提案するという方針を決めた。
- 学会事務センターの破産問題に関連して、言語学会の会費収入、定期預金等が適正に管理されているかどうか、最新の状況を調査して委員会に報告することが決められた。

2004年度第2回委員会

日 時：2004年11月20日(土) 10:00~12:30

場 所：富山大学人文学部1階大会議室

出席者：庄垣内正弘(会長)、佐藤昭裕(事務局長)、上山あゆみ、上野善道、荻野綱男、生越直樹、加藤重広、北原久嗣、金水 敏、久保智之、郡司隆男、齋藤 衛、酒井 弘、坂原 茂、坂本比奈子、崎山 理、田窪行則、田村すゞ子、柘植洋一、津曲敏郎、長嶋善郎、西光義弘、野田尚史、早津恵美子、樋口康一、福井 玲、藤本幸夫、益岡隆志、松森晶子、藪 司郎、湯川恭敏、吉田和彦(以上32名)

委任状：36名

オブザーバー：井上和子（顧問），早田輝洋（顧問），梶 茂樹（会計監査委員），
 松村一登（会計監査委員），森 若葉（事務局長補佐）

議事に先立ち，大会実行委員長の藤本幸夫氏より挨拶があった。

[報告事項]

- (1) 第129回大会（2004年度秋季大会）について
 大会開催に際して富山コンベンションビューローから補助金50万円を受けた。同ビューローの名称を「後援」としてプログラムとポスターに記載した。また富山市からも市内宿泊者の人数と泊数に応じて学会に補助金が下りることになった。
- (2) 第130回大会（2005年度春季大会）について
 2005年6月11日（土）・12日（日）に国際基督教大学（ICU）で行うことになった。大会実行委員長は日比谷潤子氏である。
- (3) 第131回大会（2005年度秋季大会）について
 2005年11月19日（土）・20日（日）に広島大学で行うことになった。大会実行委員長は町博光氏である。
- (4) 常任委員会の報告
 9月18日に第2回常任委員会を行った。
- (5) 各種委員会からの報告
 - ・編集委員会（吉田和彦編集委員長）
 『言語研究』第126号は年内に刊行予定であること，第127号については現在編集中であることが報告された。
 - ・大会運営委員会（柘植洋一委員長）
 9月11日の大会運営委員会で第129回大会のプログラム案を審議し，第2回常任委員会に提案した。口頭発表は応募件数73件中45件が採択となり採択率は62%であった。ポスター発表は5件中4件が採択になり，ワークショップは1件が採択になった。また言語学会ホームページへの英文タイトル掲載については，今大会は見送られ，次回大会からの掲載となったことが報告された。
 - ・「危機言語」小委員会（坂本比奈子委員）
 11月10日・11日に東京国際交流館で，文部科学省の科研費補助金研究成果公開促進費「研究成果公开发表（A）」の補助を得，特定領域研究「環太平洋の言語」の報告会として「今，世界のことが危ない！グローバル化と少数者の言語」を開いたことが報告された。

- 夏期講座小委員会（荻野綱男委員長）
第4回夏期講座（夏期講座2004, 8月24日～8月29日）が大学コンソーシアム京都で行われ, 252名（学生165名, 一般87名）の参加があり, 160万円の黒字になったこと, 次回は2006年に東京での開催を予定していることが報告された。
 - ホームページ小委員会（松村一登委員長）
『言語研究』バックナンバーの目次について第1号からの掲載がほぼ完了したこと, 目次を利用しテーマ等による論文の検索が可能になるよう試みていることが報告された。
- (6) 広報委員会検討ワーキンググループのメンバーについて
6月19日の第1回委員会での決定を承け, 会長より, 広報委員会検討ワーキンググループのメンバーを金水敏, 熊本裕, 佐藤昭裕, 野田尚史, 林徹, 吉田和彦の各氏に委嘱し, 金水氏にリーダーをお願いしたこと, また中西印刷の中西秀彦専務（言語学会会員）にオブザーバとしての参加を依頼したことが報告された。
- (7) 日本学術会議の報告
日本学術会議の制度改正の現在の状況について, 語学文学研連委員の早田輝洋氏, 東洋学研連委員の崎山理氏から報告があり, 語学文学研連委員長井上和子氏から追加の説明があった。
- (8) CIPL 報告
CIPL 日本語学会連絡委員長嶋善郎氏より, 第18回国際言語学者会議は2008年に韓国ソウルで開催されること, 開催校は高麗大学 (Korean University) を予定していることが報告された。また *Bibliographie linguistique* の発行がオンライン版になる予定であることが報告された。
- (9) その他
- 学会事務センターの財政破綻に関して, 事務局長より, 言語学会の会計のチェック体制について報告があった。言語学会は1994年（平成6年）度以前は三省堂に事務局を置くとともに学会事務センターに会費徴収等の日常事務を委託していたが, 1994年4月に事務局を中西印刷に移し, 以後日常の事務作業を同社に委託している。普通預金および積立金用の定期預金とも言語学会会長名で独立した口座を作り, 毎年会計監査の際に内容をチェックしているが, 今回の学会事務センターの破産問題を受け, 改めて事務局長が中西印刷に赴いて預金通帳をチェックし, 間違いのないことを確認した。
 - 第128回大会で, 1) ワークショップの一つが予定の時間を大幅にオーバーして行われた, 2) 特別展示の時間がオーバーした, といった事故

があり、会場校に迷惑を掛けた。今後このようなことがないようにそれぞれの企画者に対して注意が求められた。

[審議事項]

(1) 「第19回『大学と科学』公開シンポジウム」後援について

7月28日付で、第19回「大学と科学」公開シンポジウム事務局より、後援の依頼があった。この公開シンポジウムは文部科学省の科研費補助金研究成果公開促進費「研究成果公開発表（A）」補助事業として行われるもので、今回の後援は、全部で8つ行われるセッションの一つ「今、世界のことが危ない！ーグローバル化と少数者の言語」（2004年11月10日・11日、東京国際交流館、代表者宮岡伯人氏）に関するものである。時間の関係で9月18日の常任委員会で後援を決めたことが報告され、了承された。

(2) 科研費「時限付き分科細目」の審査委員候補者情報提供について

平成17年度に新設されることが決まった科学研究費時限付き細目「社会開発と文化」分野について、学術会議より8月1日付で審査委員候補者の情報提供の要請があった。言語学会に対しては審査委員6名を選ぶための全候補者18名のうち、6名分の情報提供が求められた。締切が迫っていたため、常任委員会で審議し、2004年2月に行った平成17年度分の通常の審査委員候補者の選挙の順位に従って少数言語・危機言語の研究を専門とする6名の候補者を選び、情報提供を行った。以上のことについて報告があり、審議の上で承認された。

(3) 広報委員会について

広報委員会検討ワーキンググループリーダーの金水敏氏より、第1回委員会での広報委員会設立の方針を受け、ワーキンググループで検討を始めたことの報告があり、広報委員会は、ホームページの管理を含むネットワーク媒体による広報と、従来の印刷媒体による広報の両方の面から言語学会の広報活動を担う、常任委員会、大会運営委員会、事務局との緊密な連携のもとに活動する、という方針が示された。そして会則修正案が提出され、決を採った結果、賛成過半数で可決された。[別記1参照]

(4) 『言語研究』の電子ジャーナル化について

広報委員会ワーキンググループの答申に基づき、広報委員会が設立された後、会員数の問題、多言語の問題などについて同委員会が情報収集することになった。同時に、最終的決定は、常任委員会で検討した後、委員会で行うという方針を確認した。

(5) CIPL 分担金について

9月13日付で、CIPLのExecutive Committeeメンバー下宮忠雄氏からCIPL分担金を値上げするよう要請があった。常任委員会より、今年度については予算通りの10万円とし、来年度から年額11万円とすることが提案され、審議の上、承認された。

(6) 東洋学（アジア研究）連絡協議会への参加について

日本学術会議東洋学研究連絡委員会委員長池田知久氏、東方学会理事長戸川芳郎氏の連名で、東洋学（アジア研究）連絡協議会への参加の呼びかけがあった。これは学術会議の機構改革により東洋学研連が2005年9月末日をもって廃止されることにともない、これに代わる組織として設立が計画されたものである。言語学会としてこの連絡協議会に参加することが提案され、審議の上、承認された。

(7) 科学研究費補助金審査委員候補の推薦（情報提供）方法の変更について

科学研究費補助金審査委員の選考方法については、平成17年度分の審査委員候補者の選定より、従来の学術会議を通しての推薦から情報提供という形に変わっている。9月13日付で、日本学術振興会より、平成17年度分については過去3年間に学術会議を通して提供された候補者についての情報（平成15年度、16年度分の推薦および平成17年度分の情報提供）に、平成16年度に科研費補助金の比較的大型の研究種目（特別推進研究、特定領域研究、学術創成研究費、基盤研究S、A、若手研究A）の交付を受けた研究代表者に登録を依頼して得た情報を加えて評価者データベースを作成し、これにより選考の作業を進めていること、平成18年度以降の審査委員候補者の選定に当たっては、各年度の科研費の交付内定者の情報を追加して同データベースを充実していくこと（追加対象を基盤研究B、さらに人文社会系では基盤Cまで拡大予定）、同時に、当分の間、関係学協会からも直接の情報提供を受け付けることの通知があった。そこで言語学会としては、委員からの推薦に基いて常任委員会で選考し、追加の情報提供を行うことが提案され、審議の結果承認された。候補者の推薦については後日全委員に郵便で依頼することとなった。なお、この依頼は11月24日付で事務局より発送した。推薦の締切は2004年12月末日とした。

(8) その他

10月28日付で、日本学術会議会員候補者選考委員会委員長吉川弘之氏より「日本学術会議会員候補者に関する情報提供」の依頼があった。日本言語学会には、10名以内（うち「産業人・実務家、若手研究者、女性研究者」の合計が5名以上、「女性研究者」の数が3名以上、「地方在

住者」の数が6名以上)の情報提供が求められた。選考方法を審議した結果、委員会出席の委員に各自10名以内を推薦してもらい、その中から常任委員会が種々の条件を勘案して最終的に10人の候補者を選んで情報を提供することが決まった。直ちに、10名連記での推薦を行い、荻野綱男、樋口康一両氏の補助のもと、選挙管理委員の金水敏、郡司隆男、野田尚史各氏による被推薦者確認の作業を行い79名の氏名を確認した。[別記2参照]

〔別記1〕 言語学会会則の改定

(旧)	(新)
第3章 役員 (中略)	第3章 役員 (中略)
第11条 本会に次の役員を置く。	第11条 本会に次の役員を置く。
会長 1名	会長 1名
事務局長 1名	事務局長 1名
顧問 若干名	顧問 若干名
評議員 若干名	評議員 若干名
委員 約70名	委員 約70名
常任委員 若干名	常任委員 若干名
大会運営委員長 1名	大会運営委員長 1名
大会運営委員 若干名	大会運営委員 若干名
編集委員長 1名	<u>広報委員長 1名</u>
編集委員 若干名	<u>広報委員 若干名</u>
会計監査委員 2名	編集委員長 1名
	編集委員 若干名
	会計監査委員 2名
第16条 (中略)	第16条 (中略)
2 委員は会長を議長とする委員会を構成し、委員会の任務・権限等は次の通りとする。	2 委員は会長を議長とする委員会を構成し、委員会の任務・権限等は次の通りとする。

- a) (中略)
- b) (中略)
- c) (中略)
- d) 常任委員会，大会運営委員会および編集委員会の活動方針，活動報告の承認（後略）

第 18 条 大会運営委員長は，(中略)

第 19 条 編集委員長は，(後略)

第 20 条～第 31 条

注記 (中略)

- 第 19 条第 4 項について (後略)

- a) (中略)
- b) (中略)
- c) (中略)
- d) 常任委員会，大会運営委員会，広報委員会および編集委員会の活動方針，活動報告の承認（後略）

第 18 条 大会運営委員長は，(中略)

第 19 条 広報委員長は，会長が個人会員中より指名委嘱する。任期は 1 年半とする。

2 広報委員長は，学会の広報活動に関する責任を負い，常任委員会に出席し，諮問に応ずるものとする。

3 広報委員長は，会長と協議のうえ，広報委員若干名を個人会員中より指名委嘱し，広報委員会を組織する。

第 20 条 編集委員長は，(後略)

第 21 条～第 32 条

(1 条ずつ繰り下げる)

注記 (中略)

- 第 20 条第 4 項について (後略)

「附則」の最後に次の一行を追加する。
(2004 年 11 月 20 日修正案可決。2005 年 4 月 1 日施行。)

〔別記 2〕

常任委員会は，この委員会で推薦された 79 名の個人会員の中から，次の 10 氏を選んで第 20 期日本学術会議会員候補者になることの承諾を得，12 月 22 日付で学術会議宛にこの 10 氏についての情報を送付した。

上野善道，大津由紀雄，梶 茂樹，木部暢子，金水 敏，庄垣内正弘，原田

かづ子, 日比谷潤子, 松森晶子, 湯川恭敏 (以上敬称略, 50 音順)

2004 年度第 2 回「危機言語」小委員会

日 時 : 2004 年 11 月 10 日 (水) 18:00~18:30

場 所 : 東京国際交流館・プラザ平成

出席者 : 梅田博之, 遠藤 史, 奥田統己, 風間伸次郎, 梶 茂樹, 金子 亨,
呉人 恵, 坂本比奈子, 佐々木冠, 笹間史子, 白井聡子, 田村すゞ子,
千葉庄寿, 角田太作, 中山俊秀, 稗田 乃, 宮岡伯人, 村崎恭子

[議事と報告]

日本語学会大会での「危機言語」小委員会企画のワークショップ・特別展示について

- (1) 第 129 回日本語学会大会で応募予定であったワークショップが取り止めになったことをふまえ, 第 130 回大会 (ICU) では当初予定していたポスターセッションではなく, ワorkshop に応募する. なお, 題目は予定通り「フィールドから見えてくる言語の類型: 抱合語と複統合語」とすることが決定した.
- (2) これを受けて, 特別展示は秋の第 131 回大会にておこない, 参加者については, 本委員会委員の佐々木冠氏に引き受けていただく他, 随時募っていくことで合意された.

2004 年度夏期講座小委員会報告

日本語学会第 4 回夏期講座に関して, 実行委員長の堀川智也氏から以下の報告があった.

- (1) 2004 年 8 月 24 日 (火) から 29 日 (日) の 6 日間, キャンパスプラザ京都 (京都市) を会場として第 4 回夏期講座を実施した.
- (2) 受講者は 252 名であった. その他に, 講師 12 名, 実行委員 3 名, アルバイト 4 名, 小委員 4 名などが参加した.
- (3) 参加費を中心とする収入 6,096,000 円に対して, 講師謝礼, 宿泊費, 印刷費などの支出は 4,495,797 円となり, 約 160 万円の黒字が出た.

2006 年度には東京地区で第 5 回の夏期講座を開催する予定である. 実行委員長および実行委員を始め, 開催の詳細は未定である.

第 129 回大会

期 日 2004 年 11 月 20 日 (土)～21 日 (日)

会 場 富山大学 (五福キャンパス)

第 1 日 (11 月 20 日)

開会挨拶

開会の辞

会 長

開催校挨拶

瀧澤 弘

公開講演

「文献学と言語研究」

藤本 幸夫

公開シンポジウム

「データとしてのことば」

司会 加藤 重広

パネリスト

三原 健一「理論言語学におけるデータ」

呉人 恵「フィールドでデータを集める」

樋口 康一「文献からのアプローチ」

伊藤 雅光「データをどう処理するか」

第 2 日 (11 月 21 日)

口頭発表 午前 10 時から

。 A 会場

司会 益岡 隆志

(A 1) 10:00～ 状態文における交替現象と時間性 眞野 美穂

(A 2) 10:35～ 「…タ」で表わされる名詞修飾について 江口 清子

(A 3) 11:10～ 日本語の時間関係を表す従属節 大浦 真

司会 渋谷 勝己

(A 4) 12:40～ 相互・再帰の曖昧構文について—日本語の「V-合う」構文の獲得を中心に 中戸 照恵

(A 5) 13:15～ 対照の「は」を伴う全称数量詞を含む否定文の解釈の習得について 照沼 阿貴子

司会 町田 健

(A 6) 14:00～ 日本語とフランス語の差異否定型トートロジーの翻訳可能性 酒井 智宏

(A 7) 14:35～ フランス語の感嘆文について 山本 大地

(A 8) 15:10～ 二項の結びつきを承認しないフランス語の NP qui... 型焦点化構文 金子 真

。 B 会場

司会 井上 優

(B 1) 10:00～ 発話者志向の語用論:「けど」の手続き的 尾谷 昌則

- 意味を通じて
- (B 2) 10:35～ 「自分」と「自己 (ziji)」について 吉 永 尚
- (B 3) 11:10～ 現代中国語における複合動詞後部要素
“完”, “好” の意味記述 木 村 恵 介
司会 小泉 政利
- (B 4) 12:40～ θ 位置への移動に課せられる一様性の条件 高 橋 久 子
- (B 5) 13:15～ 日本手話の多重疑問詞疑問文 山 本 将 司
司会 田端 敏幸
- (B 6) 14:00～ 漢語北京方言における声調連声規則の適用 増 田 正 彦
領域
- (B 7) 14:35～ 朝鮮語諸方言 1 音節語幹用言のアクセント 孫 在 賢
- (B 8) 15:10～ 釜山方言の外来語アクセントを決める 全 鎬 璟
もの: 分節音の情報と音節構造
- C 会場
- 司会 北野 浩章
- (C 1) 10:00～ チャック語の動詞述部標識 “he?” の意味 藤 原 敬 介
と用法
- (C 2) 10:35～ アタ語 (パプア諸語, パプア・ニューギ 柳 田 達 也
ニア) の独立代名詞の非単数指示と統語
機能について
- (C 3) 11:10～ バラオ語における Non-Emphatic Pronoun 下 地 理 則
の分類—接辞・接語・語の判定
司会 生越 直樹
- (C 4) 12:40～ Obviation, Number and Movement 廣 瀬 富 男
in Plains Cree
- (C 5) 13:15～ アリュートル語の所有・存在をあらわす 永 山 ゆ かり
2つの形式について
司会 樋口 康一
- (C 6) 14:00～ シベ語の名詞接尾辞 -ni について 木 村 滋 雄
- (C 7) 14:35～ Optional Plural Marking in Mongolian 吉 原 麻 由
- (C 8) 15:10～ モンゴル語の認識動詞 山 崎 雅 人
- D 会場
- 司会 坂原 茂
- (D 1) 10:00～ 日本語数量詞の位置と意味 岩 田 一 成
- (D 2) 10:35～ イディオムの比較構文から捉えた「比較 澤 田 治
文」の本質: 構文理論的アプローチ

- (D 3) 11:10~ Discourse as Blending: Beyond Langacker's (2001) Analysis 安原和也
司会 郡司 隆男
- (D 4) 12:40~ 英語の裸複数名詞と非可算性 森 香奈絵
- (D 5) 13:15~ (In)definiteness of Japanese Plural “-Tachi” 橋本 将
吉田 光演
司会 三藤 博
- (D 6) 14:00~ Toward a Syntactic Treatment of Japanese Causatives 川原 功 司
- (D 7) 14:35~ いわゆる順序助詞のマデ句と数量詞遊離 田中英理
構文の意味論の類似性及び相違点について
- (D 8) 15:10~ A Statistical Analysis of the Nominative/Dative Alternation in Japanese (presented in English) 牧 秀 樹
森 島 玉 峰
後 藤 瑛 子
伊 藤 歌 那
- E 会場
- 司会 岸田 泰浩
- (E 1) 10:00~ 現代グルジア語の2種類の関係節 児島 康 宏
- (E 2) 10:35~ 上ソルブ語の *na-* 動詞と再帰代名詞 *so* 笹原 健
- (E 3) 11:10~ フェーロー語の二つの属格 入江 浩 司
司会 新田 哲夫
- (E 4) 12:40~ アイヌ語十勝方言の継続相を表す形式 *kor an* について 高橋 靖 以
- (E 5) 13:15~ Information Structure and the Choice of Adjectival Predicates in Hirara-Miyako Dialect of Ryukyuan Koloskova Yulia
司会 上山あゆみ
- (E 6) 14:00~ Antisymmetry and Declaratives 赤阪 友希子
in Khoekhoe
- (E 7) 14:35~ New Findings in Modern Irish (presented in English) 牧 秀 樹
Donall P. Ó Baoill
- (E 8) 15:10~ クスコ・ケチュア語における抱合的な構造 蝦名 大 助
- F 会場
- 司会 酒井 弘
- (F 1) 10:00~ The Effect of Instruction on English Relative Constructions: Observations 池田 恵

of Sentence Processing Strategies
(presented in English)

- | | | | |
|-------|--------|---|--|
| (F 2) | 10:35~ | 文読解時間に与える統語構造と格助詞配列順序の影響—「ヲ格目的語動詞使役文」と「ニ格目的語動詞使役文」との比較— | 小 泉 政 利
玉岡 賀津雄
宮 岡 弥 生 |
| (F 3) | 11:10~ | 日本語使役動詞の脳内処理メカニズム：事象関連電位による研究 | 高 祖 歩 美
曾 雌 崇 弘
伊藤 たかね
杉 岡 洋 子
萩 原 裕 子 |
| | | 司会 三原 健一 | |
| (F 4) | 12:40~ | 語りの when 節の意味構造 | 原 由紀恵 |
| (F 5) | 13:15~ | That/φ 関係詞に導かれる時の関係節の意味と構造—特に先行詞の性質について— | 渡 辺 良 彦 |

ポスター発表 11:40~

◦ G 会場

- | | |
|--|---------|
| 日本語等位二字交替漢語三分類の意味合い | |
| 一反対・矛盾概念の対比と中間概念の三層構造— | 菅 野 憲 司 |
| 時制及び格助辞と結合性を持つ形態素の意味論的 | 山 橋 幸 子 |
| 考察—状態変化の結果所産を中心に | |
| パソコンを用いた言語地図重ね合わせの手法とその展開 | 福 嶋 秩 子 |
| Aspect, Backward Event-Sequencing and Event Granularity in <i>When</i> -Sentences (presented in English) | 入 江 牧 子 |

ワークショップ 14:00~

◦ F 会場

東アジア言語比較研究の観点から見た日本語・中国語の複合動詞

- | | |
|----------------------|---------|
| 司会者 酒井 弘 | |
| 中国語結果複合動詞の形成と語彙概念構造 | 秋 山 淳 |
| 中国語結果構文の派生とアスペクト特性 | 鈴 木 武 生 |
| 時間的観点から見た日本語複合動詞の結合 | 張 楚 栄 |
| 動詞句付加構造として捉えた日本語複合動詞 | 張 超 |
| | 酒 井 弘 |

◇ 退 会

国内個人会員	12名
在外個人会員	1名
国内団体会員	1名



◇ 本誌は、独立行政法人日本学術振興会平成16年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を得て刊行されたものである。